

法然上人

◆目次◆

1	誕生……………	2
2	父の遺言……………	4
3	母への想い……………	5
4	比叡山へ……………	6
5	法然房源空……………	8
6	教えを求めて……………	9
7	救いを求める人々……………	10
8	愚かさの自覚……………	11
9	お念仏との出会い……………	12
10	東山吉水……………	13
11	二祖対面……………	14
12	大原問答……………	15
13	『選択本願念仏集』……………	17
14	法難……………	18
15	流刑……………	19
16	讃岐……………	20
17	遺跡……………	22
18	『一枚起請文』……………	23

阿弥陀仏の大慈悲を信じ、命の終わった後に
極楽浄土に生まれたいと心から願ひ、南無阿弥
陀仏だぶつのお念仏をとなえる毎日をおくること――。
これが私たちの浄土宗の教えです。そしてそ
の浄土宗を開かれた方が法然上人です。

法然上人はなぜ、この教えを広めようとされ、
また私たちはなぜ、八百数十年にわたり法然さ
まの教えを素晴らしい教えとして信奉してきた
のでしょうか。

その答えは、法然上人のご生涯の中に見出す
ことができるはずです。ごいっしょにタイムト
リップしてみましよう。

1 誕生

法然上人は、平安時代も末のころ、長承二（一一三三）年四月七日、美作国久米南条稻岡庄、現在の岡山県中央部にある久米南町誕生寺の地でお生まれになりました。生家はその地の豪族で、父は漆間時国うるまのとくにといい、その地の治安を司る押領使おうれいしという役に任じられていました。母は秦氏はたうじといいました。

夫妻には久しく子どもが授からず、「岩間の観音さま」と呼ばれる寺に祈願を重ねていました。そしてその成満じようまんの日、秦氏かみそりが剃刀を呑む不思議な夢を見て懷妊され、生まれたのが法然上人でした。その日、空には紫の雲がたなびき、尊い人が生まれた瑞しるしとされる白い二流ふたながれの幡はたが、どこからかたなびいて館むくの椋むくの木に掛かったといひます。生まれた子は、勢至丸せいしまると名づけられました。「智恵の仏さま」である勢至菩薩ぼさつにちなんだものです。



2 父の遺言

両親の慈愛のもと、健やかに成長した勢至丸でしたが、九歳の時、明石定明あかしただあきりという、その地の莊園を管理する一族の夜襲を受け、父時国公が突然の最期を遂げます。土地の豪族と、朝廷の権威にあった明石一族との確執が原因ともいわれています。

時国公は死に臨み、勢至丸に「このたびの出来事はすべて私の至らなさによるものである。もし、これを恨みに思い、お前が仇を討てば、相手もまたお前を恨みに思い、仇討ちは代々尽きることがない。出家をして私の菩提を弔い、また自らも覺りを得てくれ」と遺言されたのでした。

勢至丸は、鳥取県との県境に近い那岐山なぎさんにある菩提寺の住職であった母の弟、観覺上人かんかくのもとに入りました。そしてさらに、当代一の仏教の学問所であった比叡山のほに上って学ぶことになります。